

教育実践報告

教師をめざす学生の不安と課題 —「教職論」の授業から見えてくること—

今泉 博

Anxiety and Some Key Problems Confronted by Students Aspiring for School Teachers:
What Seen through the Author's Experiences in the Lectures on the Teaching Profession

IMAIZUMI Hiroshi

要 旨

入学してきた学生は小学校から高校まで、さまざまな形で「教えられ」「指導され」てきた。教師になるということは、それとは逆に、「教え」「指導する」という側に立つということを意味する。

学生は授業を通して、教育現場の厳しさと教師の責任の重大さを知ると共に、教師という仕事の魅力も感じるようになる。

「教職論」の授業の感想などから見えてくる、教師になることに対する不安や課題などを探っていきたい。

キーワード

教職論 授業 間違い観 アクティブラーニング いじめ 教師

目 次

はじめに

- I. 教師として務まるのかどうか不安に
- II. 「いじめ」「学級崩壊」等にどう対応するか
- III. 授業での子どもたちの力に驚く
- IV. 教師になる上で必要な力を意識して
- V. おわりに

文献

はじめに

教師になる上では、「自分が」「自分たちが」これまでに受けてきた教育を相対化して捉えなおすということは欠かせない。「教職論」では、その日の授業によって、テーマや扱う内容はちがっても、グループ討論などを通して自分たちが受けてきた教育内容や指導について、お互いに出し合い、ふり返ってみることを続けてきた。学校によって、学級によって、先生によって、共通な面もありながらも多様であり、自分が受けてきた教育とかなり違っていることも実感していく。直接的ではないが他の学生の体験を聞くことによって、教育の視野を広げることにつながる。

「教職論」の授業では、現在の学校現場が抱えている課題から、大きく分けて3つのことを重視して取り組んできた。

1つ目は、「いじめ」や「学級崩壊」や「不登校」など、多くの学校・教師が抱えている課題についてである。それを一般的にではなく、リアルに捉えられるように、実際に教師が直面した具体的な問題を提示して、自分たちが教師だったらどうするかを考え合うようにした。

2つ目は、学校生活の大半を占める授業をどう創るかということについてである。小学校から中学・高校まで、膨大な数の授業を学生が受けてきているにも拘わらず、印象に残る授業や記憶に残る授業がほとんどないという学生が多い。先生方は、熱心に指導して下さったのに、「なぜそうなのか」ということも、これからの教育を考える上で不可欠である。多くの学生は、単なる機械的な練習や意味がよく解らないことを憶えること中心学習では、一時的に憶えたとしても、剥がれ落ちてしまうことに気づく。しかしどうしたら子どもたちが意欲的に授業に参加し、豊かに学ぶことができるようになるかは大きな課題である。それを具体的な教育現場での実践をもとに探っていくようにした。

3つ目は子どもの命を守る教育についてである。プールでの事故や遠足での事故など、学校教育と関わった事故も少なくない。ほとんどの子どもと教職員が、津波で亡くなってしまった宮城県石巻市の大川小学校の悲惨な事態は、記憶に新しい。当然のことではあるが、教育という営みは子どもたちの命があってはじめて成立する。具体的事故の事例をもとに、子どもの教育に携わる教師は、危険を予知したり、対策をとったりすることが必要であることを学べるようにした。

教育という仕事は、予定通りには進まない。学級で突然トラブルが起こったり、授業で予想もしなかったような考えが出されたりすることは、決してめずらしいことではない。その場その場で、対応が求められる。教師には、時には失敗しながらも実践を通してそのような力を育てていくことが求められる。

15回の「教職論」の授業を通して、学生はどんなことを感じ・考えたか。さらには教師という仕事に対するイメージがどう変わってきたか。その一端を授業の感想やレポートなどから知ることができる。

最初は、現場の状況を知れば知るほど、自分は教師としてやっていけるかと不安を抱いていた学生もかなり見受けられたが、教師の仕事の魅力も実感するなかで、教師という仕事に本気でチャレンジしてみようという学生も増えてきていることは、うれしいことである。

I. 教師として務まるのかどうか不安に

1. 教師を志望したきっかけ

教師を目指して入学してくる学生にたずねてみると、担任してくれた教師が「楽しそうに、分かりやすく教えてくれた」「困ったときに親身になって相談にのってくれた」とか、「落ち込んで

いたときに励ましてくれた」など、教師の温かい対応に触れて、教師になろうと思ったという学生が多い。

そんな学生の一人が、次のように記している。

「私は高校2年生の時に、数学科の先生であり、担任だった先生のようになりたいと思い、小学校教員になるという夢を持ち松本大学教育学部学校教育学科で学ぶことを決めた。その担任の先生は、いつも厳しくまじめな印象の先生だが、数学の授業になると、まじめな印象の先生がとても元気に楽しそうに授業を進めるのだ。私とその先生を目指そうと思った一番の理由が、生徒が一番苦手意識を感じるだろうという問題でも、先生自身が1回生徒の立場になって考え、分かりやすいと思った教え方をするからである。私はこの先生のおかげで中学まで苦手だった数学が好きになり、数学のテストでも良い点をとることができるようになった。数学の先生がしてきた教え方には、ちゃんと意味があるというのだ。数学の授業になると、人が変わったように元気に楽しそうに教えるのは、もともと数学が好きなのもあると思うが、教える側の先生が楽しそうに教えることで、生徒自身にも楽しんで数学を学んでほしいという思いがこめられている。どんな難しい授業でも、『難しい』や『解けない』や『数学嫌い』というマイナスの気持ちでは苦手意識を感じるだけだからである。それなら明るい気持ちで数学を学んだほうが集中することもできるし、解けたら喜びを感じることができ興味を持ちやすくなるからだ。もう一つの生徒の立場になって考えるというのは、生徒の目線から考えることによって、苦手と感じやすい問題を見つけることができ、その問題を分かりやすく解く方法を考えることができるというのだ。だから私はこの先生のように生徒の立場になって考えることができ、生徒が興味を持って学ぶことができ、解けたときに喜びを感じてもらえるような教え方ができる先生になりたい

のだ。」

しかし逆に、間違ったときに厳しく問い詰められたり、髪を引っ張られる体罰を受けたり、「いじめ」に遭っていても、対応してもらえなかったことに対する怒りや不信感が、当然のことながら未だに消えてはいない学生もいる。その苦しい体験から、子どもの人格や人権をだいにする教育を求めて、教師をめざす学生もいるのである。

「私は今までの学級担任全員によい思い出がない。小学校低学年の時の担任は、怒るときに髪の毛をひっぱっていた。今考えれば普通に体罰である。普段は普通の先生だったかもしれないが、体罰の印象が強く、それ以外あまり覚えていない。中学年の時の担任はどうでもいいことに対し、いちいち怒っていた覚えがある。高学年の時の先生も毎日怒っていた覚えがある(問題児が多かったということもあるが)。中学校の頃の担任は、今までの担任の中で一番嫌いである。その先生は『仲良しグループを作るな』と言っていた。完璧に的外れなことを言っている。仲の良い人がいるのは当たり前だし、苦手な人がいるのも当たり前だと私は思う。『人生の中では苦手な人と一緒に仕事をすることもあるだろうから、仲の良い人とだけしゃべるのではなく、いざとなったら苦手な人とも一緒に活動をできるようにしときなさいよ。』と指導してあげるべきだと私は思う。仲の悪い人とは無理に関わりなくともいいと私は思っているし、普通そうだと思う。しかしその担任は、自分の価値観で生徒に無理矢理おしつけていた。こんな先生は嫌われるだろうし、実際嫌われていた。私はこういった教師にはなりたくはない。」

どちらのタイプの学生も、志望動機としては頷けるものである。思い出すだけで心が温まるような体験も、記憶をたどるだけで辛くなるような体験も、交流し深め合うことは、現代の教育を捉える上で欠かせないものである。自分たち

が受けてきた教育を一度相対化してみることは、これからの教育の方向を探る上で重要である。授業で教育のことにに関して、何かをテーマにしてグループ等で議論すると、毎回自分たちが受けてきた教育のことが出されることが多い。その交流が教育に対する見方を深めることに繋がっていく。

2. 教師になるかどうか悩む学生

東京学芸大学教授の岩田康之は『教職論』(岩田康之・高野和子 編 学文社)の中で、こう書いている。

「大学で教職課程を選択する学生たちの教職志望には濃淡がある。『絶対に教師になりたい』という強い志向性をもっている者がいる半面、『就職先の一つとして学校も考えたい』『とりあえず免許状を取っておきたい』といった意識の者も相当いるのが実情である。そして、この志望は、大学在学中の学びによっても変化しうる。前者のタイプの学生が授業のなかで教育問題の困難さと複雑さに触れて『自分には教師は務まらないのではないか』と悩んだり、逆に後者のタイプの学生が子どもの発達の実相を学ぶにつれて教師の仕事への興味を増したり、ということは何々にしてある。」¹⁾

似たような状況は、松本大学の教育学部に入学してきた学生にも見られる。「いじめ」による自殺者や、10数万人にも及ぶ不登校の子どもたち、さらには学級崩壊など、教育現場では深刻な事態が依然と続いている。過労死の危険もあるような労働実態の中で、教師は教育活動を余儀なくされている。そんな状況だけに、教育学部に入学してからも、教師の道を歩むかどうかで悩む学生がいたとしても、不思議なことではない。教育の現場を深く知れば知るほど、自分は教師としてやっていけるのかという不安が生まれるのはごく自然なことである。

教師という仕事の実態を『教職論』(前掲書)を読んで驚き、次のように書いている学生がいた。

「教職とは、これまで書いてきたように、すばらしい職で、そしてとても大変な職だと感じる。それに対して給与や休みが少ないように感じるものがよくある。驚いたのは、部活の顧問をつとめている教師は、ほぼ強制のボランティアをさせられているようなものだという事だ。実際高校生の時、教師の一人から『部活があるから中・高の教師は大変。なるなら小学校の先生になった方がいいよ』と言われたことがある。現役の先生にこのような言葉を言わせてしまうことは、とても悲しいことだと感じる。教師になっても辞めてしまう人が多いのは、こういった点が少なからず関係しているのだろう。人にモノを教え、人を育てていく教師はとても魅力的で、やりがいのある仕事だ。だから、もっと待遇をよくすれば、教師全体の質ももっと上がるはずだ。

マイナス面がたくさん書かれており、もっと良くなるものかと悲しく思ったが、それでも教師は魅力ある仕事だ。私はまだ迷っているが、教師にならないとしても、勉強をしっかりとしていきたいと思う。」

「私は最初、先生とは、子どもたちに勉強を教えさえすればよいと思っていた。しかし、授業での先生のお話や教職論のテキストを開いたり読んだりしていくうちに、先生の仕事はとても多忙で複雑だということがわかった。朝7時から夜の22時まで15時間。その間、休憩はほとんどないようだ。このような勤務状態で、なぜ大きな社会問題にならないのだろうか。ベテラン教師のCさん(男性)は、書類の提出、学年行事の計画など、事務的なことも効率的にこなせないと負担とストレスが、本人と周囲の人に倍になって返ってくるので、軽視できないと語っている。成績評価の仕事が毎日のように入っていることで、関心・意欲・態度を評価する作業が教師の仕事をより過重で気の重いものになっている。これ

はベテラン教師にとっても負担は重いようだ。……(中略)……教職論のテキストを読み、私はいままで、何を考えていたのかと、バカバカしく思った。先生たちは、私たちのために、いろいろなことをしてくれていたのだった。私は、教師の大変さをあらためて実感した。冒頭で述べたとおり、先生は授業をしていればよいと思っていた私だが、今はちがう。私が想像できないほど、多忙で複雑であった。小・中・高の教員3,000名を対象として行われたアンケートで、73%の回答のうち、57%の教師がバーンアウトか、その予備群であるという実態があるようだ。学年主任や学年教師集団が日ごろから愚痴をこぼし、悩みを伝え合うことができるか否かで、負担感・疲弊感は大きく異なることがわかった。学年運営のリーダーである学年主任の教育的見識や人柄は大きな要素である。リーダーに恵まれなかった場合、学級担任は極限まで追い詰められることがあるようだ。困っている教師や悩んでいる教師をほったらかしにしない気風を、管理職も教職員組合もともに作り上げていく努力が、求められているということがわかった。……(中略)……私の中学の担任の先生だった人は、とても元気で悩み事などない明るい先生であったが、最近、うつ病らしき症状で学校に行けなくなってしまったという話を聞いた。このテキストで学んだように、困っている教師や悩んでいる教師をほったらかしにしないような、関係性を築いていかなければならない。」²⁾

かつては元気に仕事をされていた教師が、学校に行けなくなってしまふほど、教師という仕事は、精神的にも肉体的にも重労働であることを実感したのだった。体調が悪くても、自分が休むと、子どもたちの教育に支障が出てしまうような状況だけに無理してしまう。そんな実態は即刻改善されなければならないという思いが文章からも伝わってくる。

教育関係の雑誌ではない『週刊東洋経済』(2017

年9月16日号東洋経済新報社)³⁾でも、「生徒も教員も危ない」「学校は完全なブラック職場だ」として『学校が壊れる』というタイトルで特集を組んでいる。教師の過酷な実態は、徐々に知れわたってきている。教育行政が必要な教育予算を組んで、待遇なども含め本気で教育現場の実態を改善するかどうか問われている。そうでなければ、教師を志望する学生は減っていく可能性もあり得る。

3. とりあえず教員免許を取得しようとする学生でも

岩田は先の『教職論』のなかで、さらに続けて「大学入学時点、あるいは教職課程の学びを始める時点での教職志望の強さは、優れた教師になることには直結しないといえる。」「『絶対に教師になる』と脇目もふらず一途に思い詰めたり、素朴なあこがれだけで教職を志望したりするよりは、同時代的な労働力市場全体を見渡し、同時に自らの適性を客観的に把握したうえで、双方を見据えてキャリア選択をするなかで教師という職業を、自覚的に選び取ることが重要である」と述べ、教師という仕事を一度相対化して捉えてみることの重要性を指摘している。

当初は工学部に行くことにしていた筆者自身も、経済的な問題もあり、家からでも通える近くにある大学に変更したのだった。したがって入学当初から、教師になるなどという考えがあった訳ではない。とりあえず、小学校や中学校等の免許状を取得しておこうという程度の思いであった。

私がサボったからなのかも知れないが、今と違って、カリキュラムの中に、ボランティアやインターンシップなどといった子どもと触れ合ったり、授業や教師という仕事を直に見て、学ぶような体験の機会は、ほとんどなかったように思う。教育実習へ行っ、初めて子どもたちと触れ合

うような状況だったと記憶している。実習の指導してくださった方(40歳ぐらいの男性)は、指導力のある先生だった。学級の子どもたち同士の関係も良よく、子どもたちが生き生き生活し、学習していた。そんな学級だったこともあり、実習で子どもたちと遊んだり一緒に授業することは、こんなにも楽しいことなのかを実感した。

教育実習のときに、小学校の実習生を代表して誰かが研究授業をするということが通例のようだった。ところが誰もやるという実習生がなくて、どういう訳か私が研究授業をする事になってしまった。2年生の『溶解』の授業だった。したがって本来は、「溶ける」とはどういうことか、その概念を子どもたちが理解することが求められる。ところが教科書では、石鹼を教材にして指導していくようになっていた。石鹼はご承知の通り、水に入れてかき回すと、コロイド状になり、白く濁った状態になってしまう。溶けるというのは、水に入れてかき回した砂糖や食塩のように、透明になることである。透明と言っても、溶けている物質によって、無色透明と有色透明がある。溶けるという概念からすれば、科学的には石鹼の場合は、溶けるとは言えない。そんなこともあり、教材として石鹼を扱うことは良くないのではないかと、担当の先生と何回か議論したことを思い出す。ただ実習生という立場でもあり、教科書に沿う形で授業を計画せざるを得なかった。当日の授業は、石鹼を速く溶かすには、どうしたらよいかを考えることであった。子どもたちは一生懸命考え、「水よりもお湯の方が速く溶ける」「石鹼を細かく砕くといい」「ただ入れておくよりも、かき混ぜた方が速く溶けると思う」というような発言が活発に出された。担当の先生も教頭先生も、「子どもたちが活発に発言し、とても良かった」「授業のねらいが達成できた」と大変喜んでくださり、その日はビールをご馳走になった。

教育実習を通して、授業を創るには専門的な

知識が要求されること、問いに対して子どもたちがどのように思考し認識するかを、さまざまな角度から考えておくことが不可欠であることも学ぶことができた。教科書をそのまま使っているのは、科学的概念などを子どもたちに正しく形成できないこともある。したがって、教科書の教材をも検討の対象にしなければならないことを教えられた。各教科の専門的な深さがなければ、教育という仕事を続けることは無理であることに気づかされた。

短期間の教育実習ではあったが、子どもたちと共に生活したり、授業したりする教師の仕事は、自分が想像していたよりも、面白くやり甲斐があることを実感した。そんな思いになったのも、担当してくださった先生のお陰であり、今でも感謝している。

教育実習でのこの体験から、私はぜひ教師という仕事をやってみたいと思うようになった。教師をめざす学生や、教師をやるかどうか迷っている学生にとって、教育実習は教師の道に進むかどうかを最終的に判断する重要な機会である。

『教職論』で岩田が指摘しているように、教師への「志望は、大学在学中の学びによっても変化する。前者のタイプの学生が授業のなかで教育問題の困難さと複雑さに触れて『自分には教師は務まらないのではないかと悩んだり、逆に後者のタイプの学生が子どもの発達の実相を学ぶにつれて教師の仕事への興味を増したり、ということは往々にしてある。』」のだ。教師になろうとは思わないで教育学部に入ってきた学生の中にも、将来教師になって子どもたちの教育にとてつもない力を発揮する学生も、出てくるはずである。その可能性をだいに、学生と接していきたいものである。日々の大学での授業のあり方が問われることになる。

Ⅱ. 「いじめ」「学級崩壊」等にどう対応するか

1. 「教える立場」への転換

教師になるということは、「教えられる立場」から「教える立場」への転換を意味する。したがって大学の授業では、生活指導上の問題や授業において、何かを理解するというだけでなく、常に「こういう場合」に直面したら、自分は、自分たちはどう状況をとらえ、どう対応するかが重要になる。教師の立場で事態を把握することで、教師の感性を徐々に身につけていくことに繋がる。そのためには、リアルな状況が提示されなくてはならない。授業を担当する教員の具体的な体験や、詳細に実践が綴られている著書や実践報告などが必要になる。抽象的・一般的なものでは、議論が深まっていくことは困難であるからだ。

大学での授業は教育現場とはちがって、直接子どもの様子をとらえることができないという限界はあるものの、教師になっていく上で、かなりのことが学べるのも事実である。現場経験のある筆者は、実際の生活指導場面でのやり取りや、授業での実際の指導の場面も一部入れながら、指導や対応の過程が見えるようにすることを心がけた。そうすることで、大学での授業が実際の学校現場での授業と重なって、イメージし易くなる。

2. 話し合いが必要だが成立しない

「学級崩壊」や「いじめ」などの深刻な状況についても、リアルに状況を提示しながら、それぞれの学生が考え、グループや全体で討議を行うという形で授業を進めた。

子どもが「荒れ」ているといっても、クラスの状態によってさまざまである。私が1年間担当した6年生のクラスは文字通り、まさに「学級崩壊」

といった状況である。「いじめ」あり「暴力」「暴言」あり、「仲間はずし」あり、授業が成立しない学級になってしまっていた。

その子どもたちが3年生の頃から、図工専科の先生が職員朝会で、「きょうは工作でナイフを使います。子どもたちはケンカをしながら図工室に来ることが多いので、何かあったら大変です。もしお手すきの先生がおられたら、図工室に来てみていただけないでしょうか」とお願いしなければならぬ状態であった。音楽の先生も、「子どもが勝手なことをして授業になりません」と悩みを語っていた。3、4年と、男の先生がかなり厳しく対応されたが、ますます「荒れ」がひどくなってしまった。5年生になり、他区から異動されて来られた先生が子どもたちにやさしく丁寧に対応してくださったが、事態はますます深刻な状態になってしまっていた。そんなこともあり、来年度の担任を決めようとしても、希望者は誰もいない。何度会議を開いても、決まらないまま3月25日の卒業式を迎えるという事態になってしまった。そんなことから私がそのクラスを担当することになったのである。

いじめられている女の子が、場合によっては「自殺」することもあり得るのではないかと私は心配した。彼女が教室を歩いていると、「汚え、こっちに来るな」と男の子たちから罵声が飛ぶ。なぜ「汚ねえー」というのかを子どもに聞いてみると、低学年のときにお漏らしをしたからだという。彼女が歩いているときに、男の子が急に足を出し、転ばされるということもあった。彼女は恐怖のあまり、まるでロボットかのように身体を固くして歩いていた。彼女は、誰とも話すことはなかった。最初は私にも口をきかない。「いじめ」られていることに対する怒りを表現しているように感じられた。

とにかく教室が落ち着かないのである。男の子たちの中にも、しょっちゅう殴られたり蹴られたりしている子たちも少なくないのである。

授業中、勝手にトイレに行く子たちがいる。紙飛行機を飛ばす子がいる。手紙のやり取りをしている子たちもいるのだ。きょうは少し静かだと思っていると、一人の子が大きな声で「きのう〇〇〇〇というテレビを観た？」などという、もう次々とおしゃべりが起こり、事実上授業ができなくなってしまうのだ。そんなときには、心臓が締めつけられる感じになる。これが度々続くようだと、教室で倒れてしまうのではないかと心配になってしまうほどだった。

この事態をどうとらえ、どう対応するかを問題提起しても、入学したばかりの学生にはすぐ分かるようなことではない。学生の中には、厳しく対応すればよいとか、学級の決まりを決めて守るようにさせたらいいのではないかなどの考えは出てきても、事態を根本から解決するような分析や対応の仕方は出てこない。それぞれが考え、グループでも討議したあとなので、分析や対応の仕方について関心・興味が高まっている。

そこで私がどう考え、どう対応したかを語ることになる。子どもたちが勝手なことをしたり、授業中おしゃべりを常にしてしまい、落ち着かない状況になってしまうのはなぜか？それはいじめや暴力があり、子どもたちが安心できないからだ。いつ自分がいじめられるか不安でならないのだ。ひとり孤立するのは恐ろしいことなのである。おしゃべりは、なんとか友だちと繋がっていたいという思いの表れでもあるのだ。したがって、いじめや暴力がなくなる限り、安心して落ち着いて学習することはできない。

しかしこのいじめや暴力をどうしたら解決できるのか。厳しく怒ったからといって、解決しないことは、3、4年生のときの男の先生の対応から明らかである。真に解決するには、話し合いが不可欠である。しかし話し合いができるような状況ではまったくない。話し合いをしなければならぬが、話し合いが不可能である。この矛盾をいかに解決するかが問われた。それじゃ

書かせるといいのか？しかし一度や二度書かせても、深刻な「いじめ」や「暴力」「暴言」「仲間外し」は解決しそうにない。それじゃ生活ノートのようなものを持たせ、書かせるようにすればよいのか？これも上手くいくようには感じられない。生活ノートであれば、自分が感じたことが中心になるので、全員の子が「いじめ」や「暴力」のことを、しかも継続して書くなどということはあるにない。

3. 紙上討論で解決めざす

そんなことを考えているうちに、「そうだ、紙上討論をすればよいのでは」とふと気づく。でも今なお「いじめ」「暴力」「仲間はずし」がある中で、最初から「いじめ」や「暴力」のことを書く子はいないだろうと思った。それでも誰か一人が、たとえ学級の小さな問題についてでも書いてくれば、学級が変わっていくきっかけになるにちがいない。支流を辿っていけば、いずれ源流に行き着くことができる。小さな問題からでも議論していけば、やがて「いじめ」や「暴力」、「仲間はずし」の問題が紙上討論の対象になっていくはずだと予想した。紙上討論をまだまったく実施していない段階なのに、不思議なことに、きっと「いじめ」「暴力」「仲間はずし」を解決していけるだろうという希望が湧いてきたのだ。

紙上討論の目的を子どもたちが常に意識できるように、B4の用紙にタイトルを「こんなことが許されていいのか」とし、サブタイトルを「勇気ある発言・行動が『いじめ・暴力・差別』のない楽しい学級を創る」とプリントして取り組むことにした。紙上討論を始めるにあたって「いまだにいじめ・暴力・仲間はずしなどが続いている。こんなことは許されないことだ。いじめ・暴力・仲間はずしなどがなくなるまで、紙上討論に取り組む」という意味のことを熱く語った。子どもたちの表情も、いつもと違って真剣だった。

本気で私が取り組もうとしていることを、多くの子が受けとめてくれた感じだった。

実際取り組んでみると、「いじめ」のことを書いた子は、予想通り一人もいなかった。ただ一人の女の子が、私がエビなど食べてジンマシンになったとき、バカにする、道具箱の物を勝手に触るから嫌だという意味のことを書いたのだった。これには、喘息になったときバカにされたことのある子は、「病気でバカにされるなんてかわいそうだ」と共感の声を寄せた。

子どもたちは、共感が広がる中で、ほんとうのことを書いても大丈夫なんだという気持ちになっていった。

一人の子が、悔しくて忘れられない体験を問題にしてくれたのだった。家に帰って、漢字ドリルをやろうとしたとき、学校に忘れてきたことに気づく。それで学校に取りに行ったのである。机の中の道具箱からドリルを出してみると、漢字の表紙がギタギタに小刀で切られていたのである。しかしその時のショックと悔しさは、担任にも、友だちにも語るができなかったのだった。そのことを紙上討論に書いてくれたのである。紙上討論に載せる文章はいつも本人の名前をカットし、誰が書いたか分からないようにしてプリントし、みんなに朝の会のときに配布した。子どもたちは、それを読んで感じたこと考えたことをそのプリントの右半分程のスペースに書いた。ほとんどの子たちが、「それはひどい」「同じ学級の仲間なのに、よくそんなことができるものだ」「自分のことのように腹がたった」など、共感と批判の声が広がる。

書いてもらった文章の中から、B4用紙の半分に収まるくらいの何人かの文章を紙上討論としてプリントし、前日と同じような形で取り組んでいった。最初は、学級の問題を書いたりしたら、「いじめ」られはしないかと心配していた子たちも、書くたびにみんなから共感されることで、安心して書けるようになってきた。何発もお腹をパ

ンチされ辛かったことや、今まで仲良くしていた子から無視され、悲しくて夜泣いていたことも記される。すると私も同じようなことがあったと書く子も出てくる。これまでもっとも「いじめ」られてきた子が沈黙を破って、「今度修学旅行があるけど、行くかどうか迷っている。5年生のときの林間学校で部屋でいじめられたから」という意味のことを書いたのだった。それには多くの子から、「みんなが楽しい思い出をつくるきなの、いじめるなんてひどい」といった声がたくさん寄せられた。

紙上討論の回を重ねるにつれて、これはほくが、私がしたことだと自ら名乗るようになる。そしてついに、今まで「いじめ」をくり返してきた子が、「僕はみんなを何回もいじめてきたので、もしリセットボタンのようなものがあれば、もう一度人生をやり直したい」という意味のことを書いたのだった。しかし私は、彼の文章をすぐプリントし、みんなに渡すようなことはしなかった。何年間にもわたって「いじめ」をしてきた彼である。行動が変わり、友だちをいじめなくなった段階で、彼の文章を紹介することにした。

「保育園のときのような優しさが戻った」「〇〇君はいじめなくなった」という声がみんなから寄せられるようになる。このような段階で初めて、実は彼はこんな文章を書いていたことをみんなの前で紹介した。今まで謝ることなどなかった彼が、みんなの前で「今までいじめていてごめんなさい」と頭を下げたのだった。このことを機会に、彼の行動は大きく変わっていった。

子どもたちからは「いじめがなくなった」「鳥のさえずりが聞こえるほど、静かに勉強できるのがうれしい」という声が届く。5月中旬から6月上旬にかけての取り組みで、静かに落ち着いて学習できるようになったのである。なによりも、いじめられていた子が生き生きとした表情で生活し、授業でも発言するようになったことは、ほんとうにうれしいことだった。4月担任した段階での

あの荒れた状態のクラスが、こんなに変わるなどとは私自身夢にも思わなかった。しかし考えてみると、「荒れ」ていれば「荒れ」ているほど、「いじめ」や「暴力」は嫌だ、もっとみんなと仲良くしたいという人間的な要求も高まっていく。《「荒れ」ている学級ほど変革のエネルギー秘められている》のである。そこに依拠して取り組めば、どんな荒れたクラスでも急速に変わりうるということである。

ふり返ってみると、「荒れ」ていた時期でも怒鳴ったり抑えついたりせず、人間的な対応を貫いたことがよかったように思う。《温かな人間的な対応は理性を育む》からである。逆に《管理的な対応は攻撃性を助長する》ことにつながる危険があるからである。

全体としては、以上のような話をした後、授業の感想を書いてもらった。

4. 抑えるのではなく人間的対応が不可欠

「誰か一人でも問題に対して、何かしらの考えや、思いを持った子がいるならば、状況というのは、いくらでも変えられると思った。どんな小さなことに対して、取り上げられる教師になりたい。どんな小さなことに対して、見逃すことのない教師になりたい。今その状況に置かれている現実をしっかりと受け入れて、どのように解決していくか、どのように人と関わっていくかということを考えながら過ごしていきたいと思う。いつも嫌いなこととかから逃げてしまうことが多いけど、立ち向かっていきたい。」

「学級崩壊したクラスの現状がここまでひどいものだと知らなかった。子どもだった頃があるにも拘わらず、子どもたちの問題をよく理解していなかった。子どもの思考や、行動の原理もわからないまま学級崩壊したクラスを立て直すことは不可能であるので、この4年間で多く

を学びたい。子どもたちは紙の上では徐々に素直に話してくれるのだと驚いた。子どもたちは文章が未熟なため直接会話したりして原因を探そうと考えていたので、とても意外だった。子どもたちも自分の伝えたいことを伝えるように書く練習としても有効だと思った。

全ての学級崩壊のクラスに対応したやり方というものはないので、多くの現状を知り、自分なりに考えてみるのが大切だと思った。とても難しい問題だが、教師になれば必ず向き合うことなので、今から少しずつ考えていこうと思う。加えて、人間的対応についても、考えていかなければならないだろう。」

5. 想像できないほど難しい

「崩壊してしまった学級をどう立て直していくか、何が足りないのかをみんなで討論して考えた。解決の仕方など、想像することも出来ないほど、難しいことだなと思った。先生が実際に行って、クラスを建て直した紙上討論は、とても良いやり方だと感じた。いじめられている子は、その事実を話すことを恐れて、何も相談できず、一人で悩み込んでしまう気持ちはよくわかる。私も軽いものではあったが、そういう経験をしたことがあるからだ。いじめる子は、先生の前では、みんなに優しく、リーダーシップのある良い子である。しかし、先生などの大人の目が無い所では、変わってしまうのだ。だから先生は、気づいていなかったのかもしれない。私は先生にその事を気づいてほしくて仕方がなかった。でも、言い出すことはできなかった。一人の子にいじめられるよりも、その子と一緒にみんなにいじめられるのは、とてもつらいと思う。今回のような対処法を、たくさん事例とともに学んでいきたい。」

6. 本当のことは書けなかった

「今日の先生の話の中にあつた、いじめアンケートについては、私も同じ意見です。中学、高校の両方とも、年に3~4回のアンケートをやりました。しかし、私は1回も、いじめについて本当のことを書けませんでした。もちろんいじめがない時はいいんですが、一度だけ、中学1年生の時、座布団に、画びょうを入れられている友達、クラスメイトがいました。でも書けませんでした。自分が先生に言ったことがバレて、自分もやられるのが怖かったからです。そのような経験をしていたため、今日の授業内容は、とても身近に感じました。いじめっ子といじめられっ子の話を先生が聞こうと、平気で授業中に呼び出しをします。私はこの方法に賛成していません。だからこそ、この話を聞いたとき、とても良い方法だと思いました。また、私は学校の先生をあまり信頼していなかった時期がありました。小学校6年生の時の先生に裏切られたからです。お母さんには言わないから、本当のことを言ってごらんと言われ、本当のことを言ったのに、母に言われました。この経験から、私は、先生が生徒に信頼してもらうことはとても大切だと考え、今日の話でさらに重要だと思いました。」

7. 「あきらめない」という言葉ひびく

「荒れて授業が成立しない学級でも、絶対にあきらめないという力強い言葉が胸に響いた。どんなに小さな発言・発見であったとしても、支流は必ず源流にたどり着くので、見落とさないように教師になったらしたい。また、子どもたちは共感されることで、不安がなくなり、多くの発言ができるようになるということが分かった。

同じ班の人や他の班の人の意見を聞くことで、さまざまな考えを理解することができ、多くのアプローチの方法があることを感じることがで

きた。」

8. 無理矢理抑え込もうとしない

「教職論では、毎時間ごとに様々な問題や課題について話した。まず荒れたクラスをどうやって学習できるような環境に戻すかについて学習した。今泉先生が実際に出会った例から、どこが問題であったり、どう対応すべきなのかについて学んだ。この例では、先生は絶対に力づくで解決しようとはしなかった。……(中略)……そうして少しずつ変わっていく。他のどの授業もこのように実際にあったことを例に取り上げて始まる。今泉先生本人の経験だったり、他の先生の著書だったりする。このクラスが荒れた時の何がすごいのかといえば、決して無理矢理抑え込もうとしない点である。どの話もそこがポイントだった。ただ怒鳴って黙らせれば、その場はおさまる。しかし、決してそんなことをする先生はいない。子どもに向き合って理解してもらうように努めている。子どもの自尊心を傷つけないようにしている。これはどちらの立場にとってもよいことだ。もしただ怒って生徒の反発心に火をつけてしまえば、また同じことが起こるだけである。それがわかっているからこそ、この先生方は安直な方を選ばないのである。この方法はとても我慢する力が必要になると私は考える。先生と生徒という立場上、自分が立場の上の人間だと勘違いしている先生も少なくないからである。そういった人たちはなおさら、生徒と対等に向き合うのは難しいだろう。しかし、私はこう考えている。先生と生徒は対等な目線で信頼し合わなければならない。そうでなくてはまず学びが成立しないこと。だからこそ、教師はまず生徒との信頼関係を築いていくことが必要なのだ。」

Ⅲ. 授業での子どもたちの力に驚く

1. 感動したことは長く記憶される

学生に、小・中・高とたくさんの授業を受けてきて、感動した授業や今でも心に残っている授業は何かを聞いてみると、ほとんど覚えていないというのが実態である。このことは松本大学の学生に限ったことではない。これまで非常勤講師なども含めると、筆者もかなりの大学と関わったことになる。国立大学でも私立大学でも、関東や地方でも、似たような状況である。学校現場の先生方は、熱心に指導してくださったのに、行事や先生にお世話になったことなどは、よく覚えていても、授業については記憶に残ることがあまりないというのである。ここにこれまでの教育の一端が反映されているようにも思われる。深い意味も解らず、ただ覚えたようなことは、いずれ剥がれ落ちてしまうものであることを、学生は実感していく。

記憶にいつまでも残っていることは感動したり、どうしてだろうと心に強く感じたりしたことであることが多い。そのようにして心に刻まれたことは、何十年経っても、簡単には記憶から消えないものである。

筆者も、小学校3、4年の頃に、女性の松橋先生という方に担任していただいた。先生は科学が好きな先生のように見受けられた。アイスキャンディづくりと関わって、予想し実験したことを、今でもよく覚えている。寒い冬の日、試験管に水を入れ、それを試験管立てに立てて空気中にさらしておくのと、水を入れた試験管を雪の中に置いたのでは、どちらがよく凍るかということだった。意見は分かれたが、私は、雪の中に入れた方がカチンカチンに凍るのではないかと考えた。実験してみると、外気にさらして置いた方の試験管の水がよく凍っていたのである。そ

ういえば母親が秋に収穫したジャガイモやダイコン、ニンジンなどを畑に穴を掘って藁などを被せ、その上に土を載せて保存していたことを思い出した。冬山で遭難しそうになったときに、雪洞を作り、そこに避難するというのもよくあることだ。雪にはかなりの量の空気が含まれていることもあり、外気に直接触れているよりは、保温が可能になることを知った時には、小学生ながら感動した記憶がある。雪は大地を被う布団の役割をしていることを教えていただいたのである。

学生と話していると、自分たちが受けてきた授業の多くは、教科書をそのまま使った授業だったり、漢字や計算の練習だったり、先生が黒板に書いてくださったことをノートに写すようなことが中心だったとふり返る学生が多い。

新学習指導要領でも、「主体的・対話的で深い学び」ということが強調されている。そのためにはすぐれた教材が必要だ。管理が厳しくなり、それがますますできにくくなっては、創造的な授業は困難になる。授業の目的・ねらいと合致するものであれば、さまざまな教材を自由に発掘・選択する自由が保障されなくてはならない。そうでなければ、真の意味での「主体的・対話的で深い学び」は難しい。スローガンに終わってしまうだけである。授業は教材によって、大きく変わるからである。

2. 間違い観が問われる

授業には、教材と共に、なんでも言える人間的な自由が不可欠である。どんなに教材研究をしたとしても、子どもたちが沈黙している状況では、豊かな学びは期待できない。子どもはさまざまなことを考えながら授業に参加していたとしても、間違い・失敗を保障されないような教室では、恥をかかないために沈黙することも少なくない。その意味では、教師の間違い観が問われること

になる。昔は間違ったりすると、げんこつで頭を叩かれるということもあった。今では、そんな教師はほとんどいないはずである。多くの教師は、人間は誰だって間違いがあるのよと、間違っても温かく対応する良心的な教師がほとんどである。しかし私自身は、それでは間違いの持つ認識における積極的な役割を必ずしも認識しているとは言えないと考えている。間違いは、とてつもない世界をきり拓く可能性を占めているものであると捉えているからである。いずれにしても、教師が授業を創造していく上で、間違い観は重要な位置を占めている。空気が不足している水槽の中でぐったりしている魚が、空気を吹き込むことで、ピチピチ元気に泳ぎ出すように、間違いが保障された子どもたちは、生き生き発言し、意欲的に授業に参加するようになる。このような状況にしていかなければ「主体的・対話的で深い学び」の実現は困難である。

子どもたちが物事や自然などを深く学べるようにするには、「教えたことを教えない」ことである。これは矛盾である。この矛盾を解決していく過程が授業だと筆者は捉えている。教えたことを教えてしまうのは、山登り遠足でたとえば、教師がロープウェイで一気に頂上へ連れていくようなものである。これでは体力も判断力も、協力し合う関係も育っていかない。自分の足で坂道を汗をかきながら一步一步登っていく。途中で道を間違いそうになった時には、途中まで戻り、さらに上を目指す。体力のない子を励ましながら、やっと頂上にたどり着く。そうしてこそ遠足を実施した意義がある。授業も同じである。教えたことを教えていたのでは、子どもたちの思考力も判断力も育っていかない。子どもたちがこれまでの体験や感性・知性を総動員して、授業の課題や本質に迫っていくのである。子どもたちが問いを抱くことで学びが深まっていく。

3. バット回し対決で問いが生まれる

次に紹介するのは、6年生の理科で「バット回し対決」⁴⁾として授業したものである。

チャイムが鳴り、職員室からバットを持って3階の教室に向かおうと階段を上っていると、20分休みを終えて来たクラスの子どもたちが、「先生、次の時間、野球をやらせてくれるのです？」と声をかけてきた。私は、「そうだよ。みんなが頑張っているから、たまに野球でもやらせないと…」と言いながら、教室に入った。そして、子どもたちの前でバッティングの練習のようにしたのだった。子ども中には、本当に野球をやらせてくれるのではないかと思って見ていた子もいたようである。

実は今日やるのはこれですと、板書したのである。子どもたちは何をやらせてくれるのか、興味津々なのである。私はゆっくりゆっくり「ハ」と書き出すと、全員が黒板に集中するのである。集中はさせるものではなく、生まれるものであることを、子どもの姿から教えられる。もう「ハ」と書いただけで、きっと先生は「バ」と書くのだろうかとかかなりの子が予想する。次は小さい「ッ」を書くことを子どもたちは確信する。トと板書するとやっぱりという表情をして黒板を見つめる。続けて「回し」と書くと歓声があがる。「てこと輪軸」などと板書しても、このような歓声は上がらない。タイトルひとつで楽しさが伝わり、子どもたちはわくわくするのである。

4. 女子が圧勝する

今日は2人の人に出てきてもらい、バットの端の方を両手で握ってもらい、お互いに反対方向に回すことを確認し、グイーと回した方が勝ちになることを確認してゲームを始めることにした。誰がどっち端を持つかは、私が決めることにした。力があり強そうな子に細い方を持たせた。太い

方は力の弱そうな子に回してもらいたいからである。バットの細い方をもった子には、あなたはどっち回しの方がやりやすいかを聞き、得意な方に回すように話した。太い方を持った子には、その逆に回すことを確認した。「やってみたい人？」という、スポーツもケンカも強い子と、どう見ても弱そうな子が手をあげたのだった。私はもちろん強そうな子には、細い方を、弱そうな子には太い方を回すように話した。

後ろの席の子たちはどちらが勝つか、よく見えるように机の上に立っている。私はこの場を盛りあげるために、ボクシングやプロレスのように、青コーナー〇〇くん、赤コーナー〇〇くんとアナウンスする。すると大きな拍手が起こる。「よーい、はじめ」と号令をかけると、細い方を持った強そうな子の方が、さすがに踏ん張って、引き分けに持ち込んだのである。見ていた子たちもおもしろそうだと感じて、男の子だけではなく、女の子も手をあげはじめた。私はもちろん男子と女子を対決させるように指名していった。もちろん女の子には太い方を、男の子には細い方を持つようにさせて、男の方の回す方向を確認してゲームを続けた。全体で10回戦行った。結果は1回戦目を除いては、すべて太い方が勝っている。子どもたちは、太い方が有利であることを確信する。

ここで終わってしまったら、単なるゲームである。ここからが大事なところになる。一体なぜ太い方が有利なのかを、子どもたちは知りたくなったのである。バットの絵を板書し、手を握るあたりのバットの断面が円になることを確認し、少し大きめの円と小さめの円を書く。実際には、1本のバットの中の円だから、これが同心円状に重なっていることを確認し、その図を書いた。それをもとに議論を始めると、すぐに太い方が有利なのは、中心からの距離が違うからだという意見が出される。仮に太い方の断面の半径を2cmとし、細い方の断面の半径を1cmと

して考えることにした。すると先生、その同心円のところに、すでに使ったことのある《てこ実験器》が入っていると考えればいいという意見が出される。同心円の中心が《てこ実験器》の回転の中心として計算すればわかるというのである。いま仮にどちらも10kg力で回そうとすると、T字型の《てこ実験器》の中心から右側1cmのところに10kg力がかかり、中心から左側2cmのところに、同じく10kg力がかかるとして考えていけばよいことになる。そうすると太い方(左側)のトルクは $2\text{cm} \times 10\text{kg力} = 20\text{cmkg力}$ となり、細い方のトルクは $1\text{cm} \times 10\text{kg力} = 10\text{cmkg力}$ となり、太い方のトルクが大きくなるので、太い方は有利だということがはっきりしたのである。バットの中にてこ実験器が存在しているという子どもの発想が出てくるとは思っていなかった。子どもたちが夢中になり、興味を抱くようになると、感性も知性も想像以上に発揮され、物事の本質をとらえてしまうのである。たしか灰谷健次郎がある本の中で、子どもは哲学者であり、科学者でもあるというような意味のことを書いていたことを思い出す。子どもたちの姿から、教育の可能性をあらためて実感することができた。

次の理科の時間には、トルクを大きくする道具にはどういうものがあるか、みんなで考えあった。子どもたちからはドライバーという声がある。なぜなら、細い鉄の部分と、回す太い部分があるから、トルクを大きくできるという。「先生、黒板の上にあるスピーカーのネジをドライバーで外してほしいと」と子どもたちから要求される。実際やってみると、回すところが太いドライバーなので、容易にネジを外すことができた。子どもたちからは、オーという歓声上がる。トルクを大きくする道具が、子どもたちから次々出される。釘などを抜くパール、水道の蛇口から水をだすために回すところ、髪を切るハサミ、爪切り、栓抜き、自転車のペダル、ドアのノブが端につけているところ、…など、私たちの生活のい

たるところに、トルクが使われていることを、子どもたちはあらためて実感する。

5. トルクについての質問つづく

次の理科の時間には、バールの威力を実感してもらおうと、垂木に太い釘を打ちつけ、手で抜いてもらおうとしてもびくともしない。それで作用点から支点までの長さが3cm、始点から力点までの長さが24cm程のバールを使うと、容易に釘をぬくことができた。その威力に子どもたちも驚く。計算を簡単にするために、10kg力で力点を引いたと仮定して考えた。手だけでは抜くことができない釘を、なぜこんなに簡単に抜くことができるのか。子どもたちはこの場合も、《てこ実験器》をイメージして考えればよいことを容易に理解した。てこ実験器の中心から右側24センチのところに、10kg力の力が加わると、左側3cmのところに、何kg力の力が加わるか解けばよいことになる。左側のトルクは、 $3\text{cm} \times X = 24\text{cm} \times 10\text{kg力}$ という式になり、これを解くと80kg力になる。10kg力でバールを引けば、8倍の80kg力が作用点に加わることになるので、簡単に釘は抜けてしまうのだった。この授業が終わったときには、「先生、バールを発明した人は、どこの国のなんという人か知りたい」という子が何人もいた。

最後にはトルクを大きくする道具一つ選んで絵に描いた。

この授業を終えて一人の子が、トルクを大きくする道具や技術がなかったら、なにをやるにも力をいれないとできなくて、この世の中は、とても力の強い、力士ぐらいしか住めないと思ったと記している。その子がいうように、トルクというものが発明・発見されなかったら、車のハンドルを回せなくて、車に乗ることができないし、蛇口から簡単に水を出し、飲むこともできない。トルクを学んだことで、世界が違って見

えてくるのである。

授業が終わっても質問は続く。朝教室で仕事をしていると、「先生、僕はペットボトルのふたがなかなか開かないとき、ふたを持って太い方のボトルを回すと、簡単に開くのですが、これもトルクの問題ですか」と。私は「自分がしてきたこととトルクの勉強が結びついたところがすごい」とほめた。翌日、違う子が私のところにきて、「先生、ほくは地域の野球チームに入っていますが、いつも疑問に思っていたことがあるんです。バットの真ん中あたりを持つとそんなに重く感じないけど、端の方、特に細い方を持つと、同じバットなのにとても重く感じます。これもトルクと関係があるんですか」と質問した。私は、あなたもすごい。自分で疑問に思ってきたことが、トルクと結びついて理解できたところがさすがとほめた。

2人のこの質問は、朝の会でみんなに紹介した。2人は、うれしそうな表情をして聞いていた。学びが意味あるものだと、子どもたちに新たな問いが生まれてくるのである。

*大学の講義では、実際の授業の雰囲気を知ってもらおうと、実際にバットを教室に持ち込んで、バット回し対決も何人かに体験してもらった。

この講義を受けた学生は次のような感想を書いている。

6. 心が躍りウキウキ

「科学のおもしろさを子どもに伝え、子どもたちが参加したくなる授業を作るのはとても大切だと感じる。ただ、『今日はバットを使って実験するよ〜』といきなりバットを出して授業を行うのではなく、今泉先生のように、バットを新聞紙に包んでもってきて、中身を予想させたり、黒板に題を書くのをゆっくりなスピードにするなどの、子どもたちに興味をもたせることが必要だと思う。私も今回の授業でバットが出てきた時、

小学生のように心が躍り、何が始まるのかウキウキしてしまった。バット回し対決もとても楽しそうで、機会があったら、私も一度やってみたいと思った。結果を見て、バットの太い方をもった人が圧勝するのはなぜか班で考えたが、班の中でも様々な違う意見が出て、討論を深めることができたと思う(ちなみに私は、直径が太い方と細い方で違うため、円周が変わり、1回転させる時に回る回転数がそれぞれ違うからだと考えました)。その後、このトルク(力)をだす道具を考えてみた時は、パツと思いつかなかったが、先生や他の人が出した意見を聞いて『確かに!』と思う道具が多くあった。これからの毎日の生活の中でも少し探しながら生活してみようと思う。』

7. バットとテコが関係しているなんて

「この授業もあと少しで終わりと聞いて寂しいです。残りの1回1回も真剣に学んでいきたいと思います。『バット回し』という名前で子どもたちの興味をおこさせ集中できるようにする先生の授業の進め方が上手だと思いました。授業の最初の方で先生が言っていたように『こっち見て』とか言わなくても、自然と集中は生まれるものなんだと思いました。子どもたちは自分たちが学んだてこの原理だと気付いて、身の回りにこれを利用したものがないか積極的に探していますすごいと思いました。討論の時にてこが関係しているなんて考えが出てこなかったのです。学んだことを実践したり自分で工夫して考えたりしていかないと忘れていってしまうと思いました。ペットボトルを開けるときに、ふたではなく下のボトルの部分を回すと楽というアイデアには感心しました。今度試してみたいです。『一つのことを学ぶと世界が見えてくる』という先生の言葉は学ぶことの楽しさを表しているように感じました。科学は苦手でしたが、先生によっては楽しい実感をしてくれたので、小学生くら

いまではそこまで苦手意識を感じませんでした。教える側の人間によって、その教科が好きになったり苦手になったりすると思うので、先生の責任は大きいと思いました。工夫をして子どもたちに興味を持ってもらえる授業づくりができる力を身につけたいです。』

8. どんどん学びが発展

「バット回し対決は、普通の授業とはなにかもがちがうように感じました。私が小学生の頃の理科の授業は、座学ばかりで、危ないからという理由で実験はあまりありませんでした。なので、ときどきある実験はとても楽しくて、今でもよく覚えています。しかし、バット回し対決は、ただの実験以上に興味をひくネーミングで『え、なにをするの?』と全員が興味を持つと思います。さらにスポーツがよくできて力の強い男の子が、力のない女の子に負けてしまうというシチュエーションも、小さい子どもたちには大好物で、もっと知りたい、なんでなんだろうと思わせることができると思います。その結論が出てからも話は終わらず、『じゃあ、同じ法則を利用している道具は他に何があるだろう?』、『こんなすごい法則は、いったい誰がいつどこでどうやって発見したんだろう?』と、どんどん学びが発展していきます。バットひとつ持ってくるだけで、退屈な理科の授業が一気に学びの宝庫になってしまうのか、とても驚きました。きっとそんな授業は一生忘れないと思います。』

IV. 教師になる上で必要な力を意識して

次からの文章は、15回の授業論をふり返って、特に学んだことや印象に残ったことを書いたものである。自分が教師になる上で、どんなことを学んでいかなければならないのか、どんな力

をつけていく必要があるのかを、意識することができるようになったのではないと思われる。

1. まだまだ知識が足りない

「教師の一番の仕事とも言える`授業、についても沢山のことを学んだ。その中でも私が印象的だったのは、『教えたことを教えない授業』であった。教えたことを教えないなら、一体どういうことを教えるのだろうと最初は疑問に思った。『教えたことを教えない』というのは、一番大切なところを教師が言わず、子どもに考えさせるという授業である。ただ教師が答えを言って、授業を進めていくのでは、子どもは考えるということをしなため記憶に残りにくい。そこで、何故その答えが出るのか、もっと他の考え方はないかと考えることで、記憶に残りやすく子どもの考えを伸ばす授業になる。授業というものは、教科書に書いてあることを言っている、わざわざ学校で教える意味がない。子どもに考えさせるという時間が一番大切である。この授業では、算数や社会、理科など、自分達はどのような方法で教えてもらってきたか、自分達はこれからどう教えるかということ考えた。今までの授業を思い出すのは少し大変だったけど、小学校の先生は色々な工夫をして私達に伝えてくれていたんだということが分かった。これからは私達も色々な工夫を重ね、より分かりやすく、楽しい授業をつくっていきたい。教職論の講義は教師をめざす私達にとって、とてもよい刺激がもたらした授業である。いよいよ夢である小学校の教師になるための勉強が出来て嬉しい反面、考えてもいなかったような大変な仕事であることを実感し不安な気持ちもある。……(中略)……早く現場へ行って子どもたちと生活したいと思うが、まだまだ足りない知識は多く、不安は多い。残りの3年半で、今の自分に足りないと思う積極的に動く力、人のことを思いやる力、判断

力、英語力を身につけて、立派な教師になりたい。15回の講義は全てこれからの自分に役に立ちそうです。良い授業を受けられよかったです。これからも、コツコツとがんばっていきたいです。」

2. 集中はさせるものではなく生まれるもの

「教職論の授業の中で私は一番印象に残っている言葉がある。それは、『集中はさせるものではなく、自然と生まれるものである』という言葉である。今まで、小学校、中学校、高校と過ごして行く中で、このような考えはしたことがなかったからである。むしろ反対に、自分で自分に『集中しなければ』と言い聞かせていたかもしれない。しかし、それではいけないのだと思う。子どもが無理にでも集中しようとするということは、授業自体がそれほどおもしろいものではないからだろう。教師が集中を呼びかけるようではダメなのである。教師がすべきことは、『子どもにとって、魅力的な授業』である。`おもしろい、`楽しい、と感じられることで子どもたちはその世界に夢中になっていき、自然と集中が生まれるのである。例えば一見するとその科目には全く関係のなさそうな抽象的な事柄から話を始めたり、前回と今回、今回と次回のように、毎回の授業を繋ぎ合わせることによって、関連性が生まれたり、自分で繋がりを考えることができるので、魅力的な授業になると思う。このように将来は子どもたちの中で自然と集中が生まれるような、子どもたちの目を輝かせられるような授業ができるようになりたい。」

3. 小学生ってすごい

「先生の授業の話では、子どもたちによく考えさせ、答えさせようとしているのが多かった。例

えば大仏の話。確かに大仏は座っている。それを小学生のちからだけで、立った時の高さまで解るなんて、とてもすごいと思った。バット回しの時のみんなの考察もすごかった。感想も、小学生なのに、とてもしっかりしていてすごいと思った。これは当てたときのうれしさをいっばい感じたいから、一生懸命考えているんだなと思う。僕もいっばいいいっばいほめて、みんなの興味をわかせるような授業をしたい。生徒が質問してきたら、適当な返事はせず、しっかり調べて教えられるような先生になりたい。」

4. 論理的思考に驚く

「教職論の授業で私が最も印象に残っていることは、子どもの思考力のすばらしさだ。今泉先生が話してくださった経験談の中で、子どもたちは積極的に問いについて考え、答えを導こうとしている。その思考はきちんと答えに近づいていっており、私はとても驚いた。私は小学生のころにあれほどまでに論理的思考ができていた自信がない。そもそもあのような深い思考をしたことがないかも知れない。小学校を卒業してから何年も経ってしまった今、小学生のことを理解しづらくなってしまっていた。生活の中で小学生と触れ合う機会がなかったため小学生の実態を見失っていた。この講義で小学生の様子を聞くことができ、入学当初よりも、小学生という存在に近づくことができたような気がする。

私は小学校に入ってから高校を卒業するまで、勉強はつまらないものというように認識していた。毎日のように宿題を出され、それを作業的にこなす。授業でも、問題の解き方を教わって、そのやり方を真似して解くだけであった。このようなものを勉強であると思ってしまっていたため、つまらないと感じていたのだろう。しかし、大学に入学して以降、私は強制されない、自ら思考し、学びとっていく学習を体験して、今までの考

え方が大きく変わった。当然自分の学びたいことを中心に学んでいることも大きな要因だが、思考して学ぶ楽しさを知った。」

5. 教えたことを教えない授業したい

「教えたことを教えない」という授業をしてみたいととても強く思った。しかし、今の自分ではどうてい出来るとは言いがたい。この授業をするには子どもの自由な発想を引き出し、その発想から教えたことへの道筋を立ててあげなければならない。教えたことへの知識が十分にならないことはもちろん、関連する知識も持っていないてはならない。その上でさらに教材研究をしなければ成立しない、理想の授業であると思った。子どもが自ら考え、発問し、討論し、学習する。これがアクティブラーニングというものだと確信した。勉強嫌いにならず、逆に学ぶことが好きになる授業がアクティブラーニングの本当の姿であり、ただ単に活動したり自由な発言をするのを許したりすることではない。中身がしっかりとあり、子どもが授業中常に頭を働かせているが苦にはなっていない。そんな授業をすぐには言わずとも出来るようになっていきたい。また、子どもの発問を常に大切にし、拾ってあげることも忘れないようにしたい。」

6. 授業のアイディアに驚く

「授業の進め方で驚きだったのは、『教えたことを教えない』というものだった。授業はただ教えるだけでは効果が薄く、記憶にも残りにくいということだった。理科ではバット回しを使ってトルクについて学ばせたり、歴史の授業では、何故その出来事が起こったのかを考えさせたり、地図記号の授業では、一つの地図記号について推理させたり、というように生徒から考

えさせる授業が例として挙げられ、私には無かったアイデアに驚くばかりだった。授業を作るときに大切なのは、生徒が参加するというので、当たり前だけど忘れがちなことだと思った。これらを通して私が考える授業は、『生徒が楽しんだり興味を持てる内容で、分かりやすい』授業となった。」

7. 私もほめ上手になりたい

「教職論の授業の中で、『詩穂ちゃんの不登校』⁵⁾についての今泉先生の対応の話や、実際に教職論の時の今泉先生の指導の仕方を見て、そう感じた。今泉先生はよく生徒をほめる、ほめ上手な先生だ。教職論の授業も、私は最初、意見を出すのが恥ずかしくて怖くて手を挙げることができなかった。しかし、今泉先生が意見を出した学生たちに対して、全力でほめているのを見て、私もほめてもらいたくて手を挙げるようになった。私もほめる授業を行い、意見をよく出してもらえるような授業を行いたい。授業中に『おもしろ』をしてしまった女の子の話では、少し驚いた。『おもしろ』をした子に対する対応の仕方をグループで考えた時に、『ほめる』というのは頭にも浮かばなかった。『ほめる』という今泉先生の対応の仕方はすばらしいと感じた。しかし、ただほめればよいのではなく、きっと今泉先生は、『上手な』ほめ方をしているのだろう。私も、ほめ上手な人間を目指したいと思う。そのために今から、自分の周りの人たちや、関わった人達の『いいところ』を見つけられる目を養っていきたい。そして、ただほめているばかりでは、『ゆるゆるで甘々なクラス』になってしまうだろう。そんなクラスにならないように、『ほめるときは思いっきりほめて、叱るときはきっちり叱る』、そんな教育を行っていきたい。ここで大切なのは、『怒る』のではなく、『叱る』ということである。私は、『怒る』だけでは生徒に何も伝わらないと考える。

ほめ方が大切なと同じように、叱り方も重要だ。」

8. 松本大学でよかった

「この松本大学にきて、今泉先生の授業を受けたことで、私はより真剣に教育のことについて考えるようになった。これまでの人生で、私が出会ってきた先生はとにかく教科書をそのまま教えて、それをテストにし、知識だけを問うテストばかりやってきた。それが正しいと思っていた。実際、今の時代、世界や社会を見ると、その場で活躍しているのは頭のいい人ばかりで『東大出身』などというのが目立っていた。それを見ると、そんな人たちのようになるために勉強して、実際に自分の力を試すものとして、『センター試験』されていることに、昔は何も疑問に思わなかった。その知識自体を問う『センター試験』の根本的にある、今の日本の知識だけや、ただの教えるだけの授業形態自体を疑うことはこれまでになく、ただ勉強して『センター試験』を受けて、いい大学に入ればいいんだと、入学した当初のころは思っていた。今でもこの松本大学の今年から新しく新設された教育学部に来なかったら、このようには考えなかつたらうなと思う。それまでずっと正しいと思っていたものが、本当は正しくなくて、むしろ今の教育のあり方や教師の教え方が問題になっているんだと考えさせてくれたのは、この松本大学・教育学部である。その中でもとくに核心をついて、昔の教育のあり方や、いじめなどに対する考えが昔と比べて変わってきていると教えてくれたのが、今泉先生の授業である。今の教育では新しく『アクティブラーニング』という言葉が使われてきており、今までのただ何かを教えたり、何かを覚えさせる授業とは違い、生徒が自主的に参加する授業を作っていかなければいけないということが、今言われている。だが今泉先生はもっと前からアクティブラーニングのような教育が必要だと言われて

きたらしく、そんな今泉先生の授業は、やはり、これまで私が学んできた授業とは違い、生徒自身に何かを考えさせることを第一においた授業だった。その今泉先生の授業では考えることが多く、前までは他人事だと思っていたことについても真剣に考えるようになり、自分の教育に対する考えや見方が少しずつ変わってきたと思う。」

9. 手を挙げるのが恐くなった

「私は、小中高、特に小学校の時は、手を挙げなくても先生に当てられることが多かったです。低学年の時は、とにかく手を挙げ答えたいと思っていました。が、学年が上がるごとに分からないことも出てくるようになり、手を挙げないこともありました。しかし、ある時先生が手を挙げていない私を指名したのです。私は分からないから手を挙げていないため、しばらく考えましたが、やはり分かりませんでした。そんな私に先生は『なんで分からないんだ』と言いました。別の日、同じことがありました。私は前回のよう責められることが怖く、分からないなりに答えました。が、やはり間違っていると指摘されました。それから私は、手を挙げることすら怖くなりました。今までは手を挙げていたであろう問題も、もし間違っていたら、また指摘されるんじゃないか。と思うようになりました。」

先生はそうではありません。手を挙げない人をあてない分、“答えよう”と思っている人は必死で頭を働かせます。私もそうでした。そして、それだけではないのです。なぜ理想なのかというと、どんな答えにも共感してくれるからです。先生の教え方は、私の今までの経験からは考えられない方法でした。

私が先生になったら、そんな今泉先生のような授業ができるようになりたいです。私の今までの授業と今泉先生の授業は、対になっている

と考えます。『分からない→手を挙げない→当てられる→答えられない、間違える→指摘される』や『分かった→少し不安→手を挙げない』といった私の過去に比べて、今泉先生は『分からない→当てられない→指摘されることがない→不安なく次にいどめる』や『分からない→当てられない→けど答えたい→考える→不安だけど違うと言われないので挙げてみる→達成感』というように、今までは悪循環だったのに対し、とってもよく循環していると感じました。こんな風に私も、子どもたちの“やる気”を上手に伸ばすことができるような先生になりたいと思います。」

10. 教職論を学べてよかった

「私は『教職論』の授業の中で、多くのことを学び、様々な教育現場での問題・事実を知った。私が一番驚いたのは、『いじめ』についてである。いじめと聞くと、もう聞きなれているとか、よくあるというように思う人がほとんどであると思うし、私自身も知っているつもりになっていた。しかし今泉先生自身の体験や様々な本にのっている実際にあった話を聞くと、自分が考えていたいじめとは、比べることが失礼なほど、悲惨で深刻な事実がそこにはあった。今泉先生や、その他の先生はなんとかして、それを乗り越えてきているが、もし今、そのような現場に私が入ったら、いじめのすごさに圧倒され、おそらく何も出来ないまま一人で悩み、職を辞するだろうなと思ってしまうくらいのものであった。自分の考えていたいじめとはまったく違うという事実を知り、いじめについては定義からもう一度確認し、知識を入れ直す必要があると思い、教職論を学んでよかったと思った。このことから将来自分が教育者になったときの教育のしかた、授業展開の方法として、まずは、児童が主役の教育・授業を目指していきたいと思う。」

11. 教師像が具体的になった

「この教職論の授業を受けて入学当初にかかっていた教師像がより具体的なものになった。また、具体的になったことで、これから自分がどのようにしていけば、この理想に教師像に近づくことができるのかを考えるようになっていた。この授業は今までの私の考えを新たな考えに変えてくれた。よって将来の夢が具体的に、そこからどうしていくべきかを考えさせてくれた。この授業を受けて、様々なことを本当に丁寧に教わった。今泉先生の体験も交えながら話して下さったのでとてもためになっていた。これから自分の理想の教師像に少しでも近づけるために、しっかりと経験を積んでいきたいと思った。今までは授業をただ受けているだけであったが、これからはその先生がどういった工夫をして、どういった準備をして授業をしているかを考えながら受けていきたいと思った。そしてそれを参考にしながら、自分なりの授業というものを作り上げていきたいと思う。また、生徒との信頼関係もしっかりと築いていけるようにしたいと思う。これから教師になった時に困らないよう、様々なものを吸収して自分のものにしていききたいと思った。」

V. おわりに

筆者はこれまで、授業に関わって、学生が読んでおいた方がよいものについては、その都度紹介してきたが、テキストを購入させたことはなかった。しかし、現在の教育現場の状況や教師に求められる課題からすれば、15回の授業だけでは、カバーしきれない面もある。そんなことから学生には、テキストとして『教職論』(岩田康之・高野和子 編 学文社)を購入してもらった。テキストは授業で扱うということは、ほとんどできなかったが、テキストは12章構成なので、毎回

1章ずつ読んでくるように確認していた。

最初は、少し難しいというような声もあったものの、学生は読んでいくうちにとっても大事なことが書いてあることを知るようになる。一度読んだけれど、この本はときどき読んでみる価値があると実感した学生が少なくなかった。入学時点での教職志望の強さは、優れた教師になることには直結しないということや、素朴なあこがれだけでは教師の仕事が続けていくことは難しいという意味の指摘には、多くの学生が共感していた。学生に負担をかけないように、でもぜひ読んでみてほしいという願いから、毎回の授業の感想を書く用紙の最後に、テキストの感想を2、3行で書くようにさせた。これも良かったように思う。

教職論の授業では、学校現場の「いじめ」や「暴力」、「学級崩壊」などの深刻な実態も、できるだけリアルに学べるようにした。しかも教師になることは、教える立場、指導する立場に立たなくてはならないことから、この状況を自分が自分たちが教師だったら、この事態をどう捉えどう対応するかを度々討議してきた。まだまだ不十分とは言え、教師の視点で考えることが、少しずつできてきている感じである。

いじめや学級崩壊の深刻な状況に接し、こんな大変な現場で、自分はやっていけるか不安になってしまう学生も少なからず見られた。しかし困難な状況でも、子どもたちの心の願いを受けとめ、共感関係をつくっていけば、大きく変わり得ることを学んだ学生は、いま教師になるために本気で学び、挑戦しだしている。

しかし教育は熱い心だけでは、うまくいかない。物事を深く透徹して捉える冷たい頭脳も不可欠だ。どれだけ専門性を身につけるかが問われる。これからの時代は、教員採用試験に合格しただけでは、教師として長く教師として実践していくことは難しい。現場で本当に力を発揮できる基礎を、大学で学べるようにしたいものである。

授業を創る上でも、今から大量の本を読んだり、周りの自然や社会から、すぐれた教材を発掘できるような力をつけていきたいものだ。

大した授業はできなかったが、現在の教育の状況と課題について、教師という仕事について、理解する手がかりを僅かながら学生に提供できたのではないかと考えている。この教職論を手がかりに、実践的にも理論的にも深く学んでほしい。

文献

- 1) 岩田康之, 高野和子 編, 『教職論』学文社, pp22 (2016)
- 2) この辺りのことについても、『教職論』(岩田康之・高野和子 編 学文社)の第6章の「教師の1日」pp113-119を参照していただきたい。
- 3) 中島順一郎, 富田頌子「学校が壊れる」『週間東洋経済』第674号, pp33-63 (2017)
- 4) 今泉 博『集中が生まれる授業』学陽書房, pp (2002)
- 5) 不登校についても授業で扱ったが、今回は載せることができなかった。今泉博 編著『不登校からの旅立ち』旬報社(2006)を参考にしていきたい。